

英語の様態副詞に関する一考察

長谷川 瑞 穂

はじめに

英語の副詞 (adverb) 或いは副詞類 (adverbial) は他の品詞と異なり、従来余り体系的、包括的に研究されることがなかったが、最近副詞 (類) の研究が盛んとなってきた。Greenbaum (1968) では、informant を使った実験データを大量に駆使し、副詞を付加詞 (adjunct), 離接詞 (disjunct), 接合詞 (conjunct) の3つに大きく分け、これらを更に下位分類し、その特徴が詳細に述べられている。これを更に大々的にまとめたものが Quirk et al. (1972) である。Jackendoff の *Semantic Interpretation in Generative Grammar* (1972) にも副詞が変形生成文法の枠組で総括的に研究されている。一方、副詞の範囲 (scope) に重点を置き、文副詞と動詞句副詞を研究したものに Thomason-Stalnaker (1973), Heny (1973) などがある。更に最近では、時制との関係で時の副詞 (time-adverb) を扱ったものに, Dowty (1982), Richards (1982), Heny (1982) などがある。

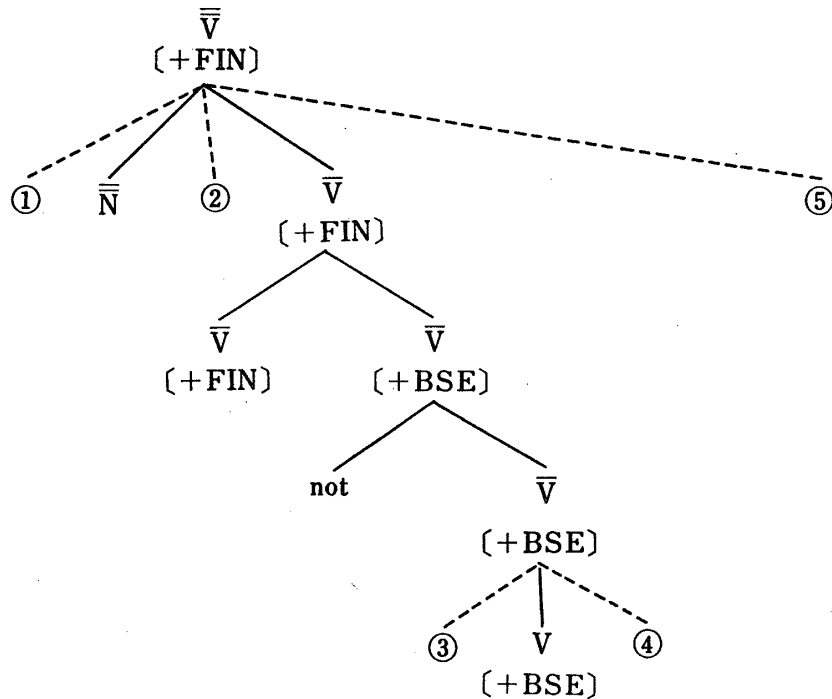
副詞の研究は、文副詞と動詞句副詞の区別、時制との関係に於ける時の副詞の研究が主であり、付加詞 (adjunct) に属し、動詞句副詞である様態副詞 (manner adverb) の研究は余りなされていないように思われる。本稿では、様態副詞を (一) 位置と情報の焦点、(二) 不透明 (opacity) との関連、(三) 中間動詞 (middle) との関連、という三つの角度から考察してみたいと思う。

(一) 位置と情報の焦点

様態副詞は、岡田 (1985), 長谷川 (1987) にあるように、通例動詞 (句) の後に置かれるが、動詞の直前に置かれることもある。これを図1の GPSG の枠組で見ると、④が動詞 (句) の後、②が動詞の直前ということになる。

様態副詞は新情報 (new information) となり、文の中では焦点 (focus) になることが多く、この場合は図1の④、即ち動詞 (句) の後に置かれる。長谷川 (1987) の native informant への副詞の位置に関する調査で、文(1)に於いて全員が様態副詞 *frugally* の位置を④と答えたのは、(1) では様態副詞 *frugally* が意味上不可欠であり、焦点となるからである。

図 1



Here; V; sentence

V: verb phrase

[+FIN] ; finite (tensed)

[+BSE] : base (infinite)

(1) ① They ② don't ③ live ④ .

岡田 (1985 : 46) にあるように、④の位置に様態副詞がくるのは、次の(2)(3)のように疑問文 How...? に対する答えとなる場合である。

(2) How did he write the letter?

(3) He wrote the letter carefully.

それに対して、様態副詞が図1の②に置かれる場合は、副詞は新情報ではなく焦点にもなっていない。次の(4)、(6)に対する答え(5)、(7)の場合がこれに当たる。

(4) What did he carefully write?

(5) He carefully wrote the letter.

(6) What did he carefully do?

(7) He carefully wrote the letter.

以上、様態副詞の起こる位置を見てきたが、次に Quirk et al. (1972) により、様態副詞の属する付加詞 (adjunct) の特徴を見てみたい。Quirk et al (1972; 423, 426, 427) によれば付加詞は次のような特徴を持つ。

A) 付加詞は否定文に於いて文頭にくることがない。

(8) *Slowly he didn't test the bulb.

(8)の文が非文となることから付加詞に属する様態副詞は否定文に於いて文頭にくることがないことが明らかになる。様態副詞は既に見てきたように肯定文に於いても主語の前にくることがないのでA)は様態副詞に関しては当然と言える。

B) 付加詞は否定文に於いて、否定の範囲内にきて否定の焦点となり得る。それ故、否定文とそれに続く肯定文で、別の付加詞と対照して起こり得る。

(9) They didn't treat him politely but they treated him fairly.

(9)の文が正しいことから様態副詞は否定の範囲内にきてその焦点となることが分かる。

C) 付加詞は疑問文の範囲内にきて、疑問の焦点となり得る。それ故、二者択一の疑問文に於いて、二つの付加詞が対照して起こり得る。

(10) Did you treat him politely or did you treat him fairly?

(10)の文が正しいことから、様態副詞は疑問文の範囲内にきてその焦点となることが分かる。

以上をまとめると、様態副詞は通例、動詞(句)の後にきて、新情報となり、焦点となること、又疑問文、否定文に於いてもその範囲内にあり焦点となり得る。更に動詞の直前にくる場合は、様態副詞が新情報ではなく、焦点にもなっていない。

更に、様態副詞は、in a _____ way, in a _____ manner と通常書き換えることができ、Thomason-Stalnaker (1973: 219) にあるように、動作 (action)、出来事 (event) の動詞と共に共起するが、状態 (state) の動詞とは共起しない。但し、これは(三)で述べる middle を含む文には当てはまらない。

(二) 不透明 (opacity) との関連

まず、opacity とは不透明、或いは意味の曖昧さとも訳され、文の中で他の文法的要素との関連により引き起こされるものである。Thomason-Stalnaker(以下 T-S と省略) (1973), Heny (1973) は、夫々副詞と opacity との関係について考察したものである。T-S (1973) では、slowly のように動詞句のみを修飾するものを述語修飾語 (predicate-modifier), necessarily のように文全体を修飾するものを文修飾語 (sentence modifier) と定義して副詞を二つのクラスに分類している。その結果、主語、目的語などの透明、不透明の読みの区別が、修飾要素の作用域にあるか否かによって区別が可能であるとした。更に、述語修飾語の中でも slowly と inten-

tionally では目的語の opacity に違いが生じることも明らかにされた。Heny (1973) では T-S (1973) を引き継ぎ, slowly のような副詞と数量詞との相対的な位置の違いと真理条件とに相関関係があることが考察されている。以下, 主に T-S (1973), Heny (1973) の論文を基に, necessarily のような文修飾語, intentionally のような述語修飾語, slowly のような様態副詞の述語修飾語と, 主語, 動詞句中の定名詞との関係について考察してみたい。

まず, necessarily のような文修飾語と opacity との関係について, T-S (1973: 203) は次のように言っている。

Only if an adverb is a sentence modifier can it give rise to opaque contexts everywhere in a sentence in which it occurs.

即ち, 文修飾語は, 文のいたる所で opaque な文脈を引き起こす。次に, necessarily が主語に opaque な文脈を引き起こす例を(11)で見よう。

- (11) a) Necessarily nine is odd.
 b) Nine is the number of planets.
 c) Therefore, necessarily the number of planets is odd.

(11) a) の文が真で(11) b) を仮定すると(11) c) の文は真ではない (false, invalid)。このことから主語が opaque になることが証明できる。更に, 同じく文修飾語の never は主語を opaque にすることが次の(12)から証明できる。

- (12) a) Nixon never met Charles Dickens,
 b) Nixon is the president of the U. S.
 c) Therefore, the president of the U. S. never met Charles Dickens.

(12) a) を真, (12) b) を仮定すると, (12) c) は真とはならない。次に, necessarily と主語以外の, 動詞句内定名詞の関係を見よう。次の(13)は余りにもよく挙げられる陳腐な例である。

- (13) a) Necessarily the morning star is the morning star.
 b) The morning star is the evening star.
 c) Necessarily the morning star is the evening star.

(13) a) を真, (13) b) を仮定すると(13) b) は真とはならないが, これは necessarily が動詞句中の定名詞(この場合は補語)に不透明を引き起こすからである。(13) a) b) c) を PTQ の考え方をういて簡単に合成化すると次のようになる。

- (13') a) $\square [m=m] \rightarrow 1$
 b) $m=e$
 c) $\square [m=e] \rightarrow 0$

但し □; necessarily, m; morning star, e; evening star

necessarily は PTQ でも t/t という sentence operator として□という記号で扱われている。□の作用域は [] の中、即ち文全体であるので、主語にも、動詞句内定名詞にも opacity を引き起こす。他の文修飾語も同じように t/t のタイプを持つ sentence operator として扱えばその作用域が文全体に及び、文全体に opacity を引き起こすことが定式化され得る。

次に, intentionally のような述語修飾語と opacity との関連について考えてみたい。

- (14) a) Oedipus intentionally married Jocasta.
 b) Oedipus is the son of Laius.
 c) Therefore, the son of Laius intentionally married Jacasta.

(14) a) が真, (14) b) を仮定すると, (14) c) は真 (true, valid) となる。このことから intentionally のような述語修飾語は主語に opacity を引き起こさないことが分る。次に目的語の場合を考えてみよう。

- (15) a) Oedipus intentionally married Jocasta.
 b) Jocasta is Oedipus' mother.
 c) Therefore, Oedipus intetionally married Oedipus' mother.

(15) a) が真, (15) b) を仮定すると(15) c) は真とはならない。即ち, intentionally のような副詞は目的語に opacity を引き起こす。reluctantly という副詞も同様に主語には opacity を引き起こさないが, 動詞句内定名詞には opacity を引き起こすことが次の (16), (17) から分かる。

- (16) a) The president reluctantly signed the treaty with Japan.
 b) The president is Nixon.
 c) Nixon reluctantly signed the treaty with Japan.

(16) a) を真とし, (16) b) を仮定すると(16) c) は真である。

- (17) a) The president reluctantly signed the treaty with Japan.
 b) Japan is the only country that could guarantee world peace.
 c) The president reluctantly signed the treaty with the only country that could guarantee world peace.

一方, (17) a) を真とし, (17) b) を仮定すると(17) c) は真とはならない。intentionally, reluctantly などの作用域は動詞句内であるから, 動詞句内の定名詞には opacity を引き起こすが, 主語に迄その作用域が及んでいないので主語には opacity を引き起こさない……と考えるのが妥当であろう。

次に, slowly のような様態副詞と呼ばれる述語修飾語と opacity の関係について考えてみる。

- (18) a) The president signed the treaty slowly.
 b) The president was Nixon.
 c) Therefore, Nixon signed the treaty slowly.

(18) a) を真, (18) b) を仮定すると(18) c) は真である。このことから slowly のような副詞は主語に opacity を引き起こさないことが分かる。次に, 動詞句内定名詞の例を, slowly と同じ様態副詞の kindly で考えてみたい。

- (19) a) They treated Mr. Kaifu kindly.
 b) Mr. Kaifu is the prime minister of Japan.
 c) Therefore, they treated the prime minister of Japan kindly.

(19) a) を真, (19) b) を仮定すると(19) c) は真である。このことから kindly のような様態副詞は主語にも, 動詞句内定名詞にも opacity を引き起こさないことが分かる。

以上, 副詞と opacity との関係をまとめてみると次のようになる。

表 1

	文 修 飾 語	述 語 修 飾 語	
	necessarily never	reluctantly intentionally	slowly kindly
主 語	不 透 明 (opaque)	透 明 (no opacity)	透 明 (no opacity)
動詞句内定名詞	不 透 明 (opaque)	不 透 明 (opaque)	透 明 (no opacity)

表1で, 文修飾副詞の necessarily, never が主語にも, 動詞句内定名詞にも opacity を引き起こすが, これは文修飾副詞の作用域が文全体であるので当然のことである。次に述語修飾語の場合を見てみると, reluctantly, intentionally のような副詞も, slowly, kindly のような様態副詞も共に, 主語には opacity を引き起こさない。これは述語修飾語の作用域が通常動詞句内であり, 主語に迄及ばないことから当然のことと言える。

次に疑問が生じるのは, 同じ述語修飾語であり乍ら, reluctantly, intentionally は動詞句内に opacity を引き起こすが, slowly, kindly は動詞句内に opacity を引き起こさない点である。述語修飾語の及ぶ範囲が述部であることを考え合わせると, 動詞句内に opacity を引き起こす方が当然のように思われる。何故様態副詞が動詞句内定名詞に opacity を引き起こさないのか。reluctantly, intentionally のような副詞は動詞句全体に functional operator としてかかる副詞であり, slowly, kindly のような様態副詞は動詞句全体ではなく, 動詞句内の動詞にのみかかる functional operator として区別する必要があると思われる。

(三) middle verb (中間動詞) との関連

安井 (1971 : 267) によれば, “本来 middle という語は, ギリシヤ語やサンスクリット語の文法で, 主語によって表わされる人や物が動詞によって表わされる動作によって影響を受ける場合に, その動詞の形又は態 (voice) について用いられる用語” であった。しかしながら, 最近の文法理論では, Keyer and Roeper (1984) や Fagan (1988) にあるように ergative との比較に於いて middle という用語が用いられ, 研究されている。ここではまず, ergative と middle の違いを明確にすることから始めたい。安井 (1971 : 161) によれば ergative (能格性) は次のように説明されている。

“一般に ergative とは, 自動文の主語と他動文の目的語との間の呼応関係をいう。それぞれ (1) The door opened. (2) John opened the door. のような自動文, 他動文がある時, これら(1)(2)の文相互の関係を ergative (本来 ‘cause’ ‘bring out’ の意味を含む) という。” Fagan (1988) は ergative と middle を区別する例文として(20)(21)を挙げている。

(20) The butter melted.....ergative

(21) Government officials bribe easily.....middle

(20)は例えば, ‘I melted the butter.’ に対して派生された ergative の構文であり, ある時点に於ける特定の出来事 (event) を表わしている。それに対して(2)の middle の文は, ある時点に於ける特定の出来事表わすのではなく, 一般的 (generic) にある事実を表わし, 通常, 時制は現在であるとしている。Fagan (1988 : 195) から時制を過去にした例文を見てみよう。

(22) *Yesterday the kitchen wall painted easily.

(22)は非文になる。但し, 文脈によっては, middle が過去時制になることもあり得るのではないだろうか。長谷川の intuition では(23)のような文は正しいと思われる。

(23) The snow yesterday melted easily.

更に Jespersen (1965 : 350, 351) は “activo-passive use of some verbs” の項目の中で, この Fagan 等の言う middle verb の現象を次のように説明している。

When we say “His novels sell very well.”, we think to some extent of the books as active themselves, as the cause of the extensive sale, while we are not thinking so much of the activity of the bookseller. The sentence therefore is descriptive of something that is felt as characteristic of the subject, and therefore, the verb generally requires some descriptive adjective or adverb.

Jespersen は「‘This book sells well’ のような文は、主語をある程度動的なものと捕え、その主語の特徴を述べている」としている。それ故、動詞は記述的 (descriptive) な形容詞や副詞類を取るとしている。ここで動詞が副詞以外を取る例を Jespersen (1965 : 351) から見てみよう。

(24) The meat cuts tender.

(25) This scientific paper reads like a novel.

上の例が正しい文であることから、middle の後には、形容詞や様態を表わす副詞句も来ることが分る。

さて、Fagan (1988 : 181) は、middle は通常命令文や進行形にならず、動詞は状態動詞 (stative verb) であるとしている。次の(26)(27)の例を見てみよう。

(26) a) Government officials bribe easily.

b) *Bribe easily, government officials.

c) *Government officials are bribing easily.

(27) a) This nail polish removes easily.

b) *Remove easily, this nail polish.

c) *This nail polish is removing easily.

(26) a), (27) a) の middle を含んだ文は、夫々 (26) b), (27) b) のように命令文にする
と非文になるし、(26) c), (27) c) のような進行形にしても非文になる。

更に、middle を含んだ文は、Levin (1982 ; 624) の指摘にあるように、“一般に人々が…”
という意味が含まれている。これは前に述べた middle の持つ generic の性質とほぼ同じこと
であるが、Levin は、例えば、‘This book reads easily’ は ‘People in general can read
this book easily.’ の意味であると言っているが、これは正しい。

Fagan (1988 : 200, 201) は更に、middle は通常、様態副詞を伴うとして、次のように言っ
ている。

A middle like “This book reads easily.” for example, states the fact that the
activity of reading the book generally takes place easily ; the book has the property
that it can be read easily. Thus a manner adverbial like easily is required in the
middle to describe just how the book is usually read.

次に、様態副詞を伴った middle を含む文をもう少し挙げてみよう。

(28) This china breaks easily.

(29) This book sells well.

(30) She doesn't photograph well.

(31) The meat cooks all the better if you cook it slow.

(32) The old gentleman's speech reads excellently.

(28)–(32)の例に見るように, middle の後にくる副詞は様態副詞である。

そして(28)–(32)の文に於いて, 夫々下線を引いた様態副詞を取ると, 容認が難しい文法性の非常に低い文になる。(28')(29')でその例を見てみよう。

(28') ? This china breaks.

(29') ? This book sells.

このことから考えて, 様態副詞は‘動詞との結びつきが非常に強い’という性質を持つことが分かる。

おわりに

(一) では, 様態副詞は通常, 動作 (action) 出来事 (event) を表わす動詞と共起し, 動詞句の後に置かれて焦点となること, (二) では様態副詞は, 主語にも動詞句内定名詞にも opacity を引き起こさないことが, 他の副詞と比較検討され, (三) では, 様態副詞は通常, middle (中間動詞) の後に不可欠であり, 一般的に主語の持つある特徴に関する事実を表わし, 現在時制が普通であることが考察された。

以上の点から考え合わせると, 様態副詞は他の副詞とは違う独特の性質……動詞にかなり密着した性質があるように思われる。今後, もう少し他の副詞とも比較検討する中で, 様態副詞自身の独自性を明らかにしていきたいと思っている。

参考文献 (Reference)

- Dowty, D. R. (1982) "Tense, Time Adverbs and Compositional Semantics" *Linguistics and Philosophy* Vol. 5 No. 1, 23-58.
- Fagan, S. M. B. (1988) "The English Middle", *Linguistic Inquiry* Vol. 19 No. 2, 191-203.
- Greenbaum, S. (1968) *Studies in English Adverbial Usage*, Longman, London.
- Heny, F. (1973) "Sentence and Predicate Modifiers in English," in J. P. Kimball ed., *Syntax and Semantics* Vol. 2, Seminar Press, New York.
- Heny, F. (1982) "Tense, Aspect and Time Adverbials, II," *Linguistic Inquiry* Vol. 5 No. 1, 109-154.
- 長谷川瑞穂 (1987) "On Negation and Adverbs in English and Japanese" 都短協英語英文学会研究紀要1987.
- Jackendoff, R. S. (1972) *Semantic Interpretation in Generative Grammar*, The MIT Press, Massachusetts.
- Jespersen, O. (1965) *A Modern Grammar* Part III, George Allen & Union LTD, London.
- Keyser, S. J. and T. Roeper (1984) "On English Middle and Ergative Constructions in English," *Linguistic Inquiry* 15. 381-416.
- Levin, L. [S. (1982) "Sluicing: A Lexical Interpretation Procedure," in J. Bresnan, ed., *The*

- Mental Representation of Grammatical Relations*, MIT Press, Massachusetts.
- Montague, R. (1974) *Formal Philosophy*, Yale University Press, New Haven and London.
- 岡田伸夫 (1985) 副詞と挿入文, 大修館, 東京。
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik (1973) *A Grammar of Contemporary English*, Longman, London.
- Richard, B. (1982) "Tense, Aspect and Time Adverbials, I," *Linguistics and Philosophy* Vol. 5 No. 1, 59-108.
- Thomason, R. H. and R. C. Stalnaker (1973) "A Semantic Theory of Adverbs," *Linguistic Inquiry* Vol. 4 No. 2.
- 安井稔 (1971) 新言語学辞典, 研究社, 東京。